

## 今週の為替相場見通し(2024年2月5日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.90 ~ 148.58	148.40	147.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.0780 ~ 1.0897	1.0791	1.0600 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		158.11 ~ 160.76	160.05	157.50 ~ 161.50
英ポンド	(ドル)		1.2614 ~ 1.2772	1.2633	1.2300 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	185.24 ~ 188.30	187.42	185.00 ~ 191.00
豪ドル	(ドル)		0.6504 ~ 0.6625	0.6512	0.6350 ~ 0.6580
(1豪ドル=)	(円)	*	95.50 ~ 97.70	96.62	95.00 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 151.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

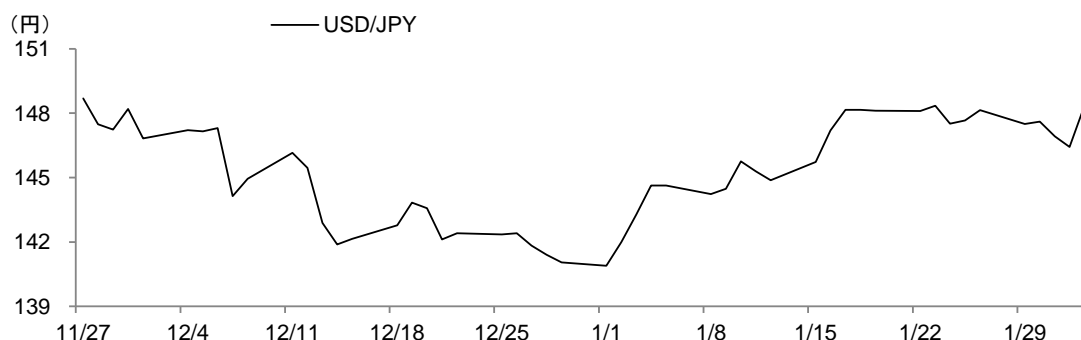
先週のドル/円相場は、米国の重要イベントに振られる展開となった。週初29日、148.17円でオープンしたドル/円は、米金利低下に合わせ148円を割り込んだ。海外時間は米四半期定例入札の公表内容を受け、米債増発懸念が後退、米金利低下が継続し、147円台半ばに下落した。30日、ドル/円は147円台前半でじり安。海外時間は米経済指標の強い結果を受けた米金利上昇を背景に、147円台後半に反発した。31日、ドル/円は日銀会合の主な意見(1月会合)のややタカ派な内容を背景に147円台前半に下押しも、月末の実需のフローを受け147円台後半に値を戻した。海外時間は複数の米経済指標の弱い結果を受け、米金利が低下する流れに合わせ146円付近に急落。注目のFOMCでのパウエルFRB議長記者会見を受け、ドル売りも一服し、147円付近で引けた。2月1日、ドル/円は下に往って来い。海外時間は米経済指標の弱い結果を受けた米金利低下の動きに一時週安値となる145.90円まで下落。2日のドル/円は午前中に146円台を回復。その後は上値の重いまま海外時間に入り、予想を大きく上回る米1月雇用統計が発表されるとドル/円は148円台まで一気に上昇、週高値148.58円をつけ、148.40円でクローズした。

今週のドル/円はドル高円安トレンドが一段と強まる展開を予想。ドル/円は先週後半にかけて一時145.90円まで下げ幅を拡大も、週末にかけて148.58円まで回復するV字回復を見せた。日銀による金融緩和策の長期化観測(植田日銀総裁は先月の金融政策決定会合後の記者会見で「マイナス金利を解除しても極めて緩和的な環境が続く」旨の発言)や、FRBによる利下げ開始時期の後ずれ観測(先週のFOMCでのタカ派な内容と、米雇用統計の力強い結果)、さらにこれら日米金融政策の方向性の違いなどを背景に、ドル買い円売り材料は揃っている。今週は本日発表の米1月ISM非製造業景況指数が市場予想を上回る場合や、ブラックアウト期間明けの米連銀総裁による発言機会が連日予定されていることから、よりタカ派な発言が見られる場合には、ドル/円は先月19日につけた年初来高値148.80円を上抜け、心理的節目である150円ちょうどを目指すシナリオを想定しておきたい。

## (3)先週までの相場の推移

先週(1/29~2/2)の値動き:

安値 145.90 円 高値 148.58 円 終値 148.40 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0900 157.50 ~ 161.50 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、米金利上昇を受けて週末にかけて約1ヶ月半ぶりの安値圏まで下落した。週初29日、1.0843でオープンしたユーロ/ドルは、ECB高官のハト派な発言を受け、独金利低下に合わせて一時1.08台を割り込んだ。30日、ユーロ/ドルはユーロ圏10~12月期GDP(速報)が予想外にマイナス成長を回避したことが好感され、独金利上昇とともに1.08台半ばでじり高となった。31日、ユーロ/ドルは米金利低下を受け一時1.0887に上昇も、FOMC後には米金利が持ち直し、一時1.08を割り込んだ。2月1日、ユーロ/ドルは底堅い米金利の動きを横目に一時週安値となる1.0780に下落も、ユーロ圏1月消費者物価指数(HICP、速報)の上振れを受けた独金利上昇や、NY時間における米金利大幅低下が下支えとなり、1.08台後半に反転上昇した。2日、米1月雇用統計の強い結果を受けて米金利が上昇する展開が重しとなり急落。続いて発表された米インフレ指標が上振れたことでドル買い継続となり1.0781まで下落。米金利が高止まりする展開に上値重く、1.0791で越週した。

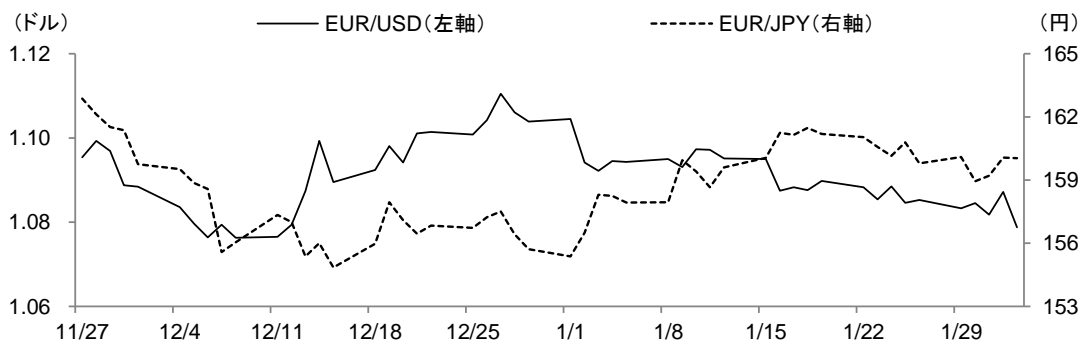
今週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想。先週発表された2023年10~12月期のユーロ圏実質GDP速報値は前期比横ばいとなり(結果+0.0%/市場予想:▲0.1%)テクニカルリセッションをかわろうじて回避したものの、欧州経済の先行き不透明感が残存。またユーロ圏1月HICPは前月から僅かながら低下した。金融政策についてはラガルドECB総裁が夏の利下げ開始を示唆して以降、ECB当局者から利下げに言及する情報発信が相次いでおり、市場では早期利下げ期待が高まっている。米国に目を移せば、FOMCでのパウエルFRB議長会見は総じてタカ派的であったことに加えて先週末の米雇用統計にて雇用市場が依然として緩んでいないことが確認され、米利下げ観測は後ずれしている。以上踏まえれば、ユーロ/ドル相場は軟調地合いが継続しやすいか。今週は、5日(月)に独12月貿易収支、ユーロ圏12月生産者物価指数、6日(火)に独12月製造業受注、ユーロ圏12月小売売上高、7日(水)に独12月鉱工業生産などの発表が予定されている。欧州経済の下振れが懸念される場合は、更なる下押し圧力となるだろう。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/29~2/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0780 高値 1.0897 終値 1.0791

(対円) 安値 158.11 高値 160.76 終値 160.05



(資料)ブルームバーグ

## 3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2800 185.00 ~ 191.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、対ドルで小幅に下落。2月1日のイングランド銀行(BOE)の金融政策発表を受けて対ドルで上昇したものの、翌2日の米1月雇用統計が極めて強い結果だったことを受けて前日までの上昇分を全て失った。BOEの金融政策発表は5.25%の政策金利が据え置かれた一方、注目されていた利上げ票は2名となった。前回12月会合後の3名の利上げ票と比較してグリーン委員が利上げ票を取り下げたのみだった。「超タカ派」のマン委員が利上げ票を投じる可能性は意識されていたものの、ハスケル委員まで利上げ票を投じたことはやや意外だった。ハスケル氏は昨年12月20日公表の英11月CPIが大幅なインフレ減速を示したこともあり、ハト派スタンスへの転換を示唆していたためだ。利下げ票は「超ハト派」のディングラ委員のみで、残り6名は据え置きに票を投じており、票の分布はタカ派的だった。また、BOEのインフレ率の予測を見ると、マーケットの織り込みに沿って政策金利が推移するシナリオでは、2024年7~9月期にもCPIインフレ率は前年比+2.2%とBOEのターゲットの前年比+2.0%を上回る見通しが示されている。会合前1月末時点で短期金利市場では5月会合での+25bp利下げが76%程度、6月会合ではフルに織り込まれていたが、BOEはこうした見方を暗に否定した格好だ。もっとも、BOEの発表はタカ派一辺倒というわけではない。ハト派的だった要素として、まずは声明文において、「追加利上げが必要となる可能性がある」との一節をガイダンスから削除し、利下げに道を開いたことが挙げられる。また、インフレ見通しでも、政策金利を現在の5.25%で一定としたシナリオでは2025年以降、インフレ率は下落トレンドを辿り、2025年10~12月以降には前年比+2.0%のターゲットを大きく下回る見通しが示されている。こうした見通しからはBOEが年内利下げを意識しつつあり問題はそのタイミングのみという印象を受ける。2月2日にはBOEのチーフエコノミストのヒュー・ピル氏が利下げ開始まで「まだやや距離がある」と発言したことを受けて、利下げ織り込みが一段と縮小、ポンドもサポートされる展開となった。しかし、2月2日に発表された米1月雇用統計では、非農業部門雇用者数が市場予想+17万人増のところ+35万3000人増という大幅な上振れとなり、かつ12月分も上方修正された。さらに、時間当たり賃金も前月比+0.6%と前月の同+0.4%から加速、同+0.3%への伸び減速を見込んでいた市場予想を大幅に上回った。極めて強かった米雇用統計を受けて、ポンドは対ドルで大きく下落。1週間の上昇分を全て帳消しにした格好となった。

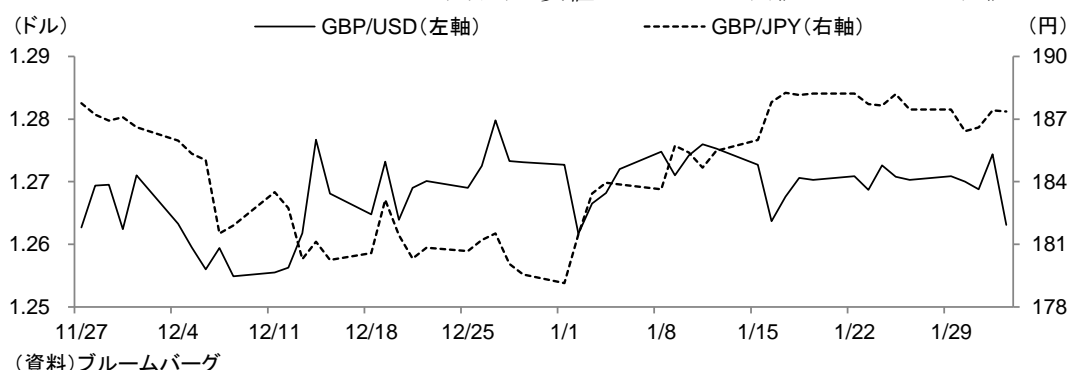
今週1週間のポンド相場は対ドルでは上値の重い展開が予想される。米1月雇用統計が極めて強い内容だったことが今週以降も市場で意識されそうだ。この点、週末2月4日(日)のパウエルFRB議長のテレビインタビューが注目される。パウエルFRB議長は1月会合において3月利下げの可能性を否定しつつも全体としては利下げ転換に向けて前進したが、雇用統計を受けてスタンスが再び変化したかを見極めたい。英国やユーロ圏では目立った指標はない一方、日本で2月5日(月)に発表される毎月勤労統計がロンドンでもにわかに注目度が高まっており、ポンドの対円相場を見極めるうえでは重要となろう。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/29~2/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2614 高値 1.2772 終値 1.2633

(対円) 安値 185.24 高値 188.30 終値 187.42



## 4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6350 ~ 0.6580 95.00 ~ 98.00 円

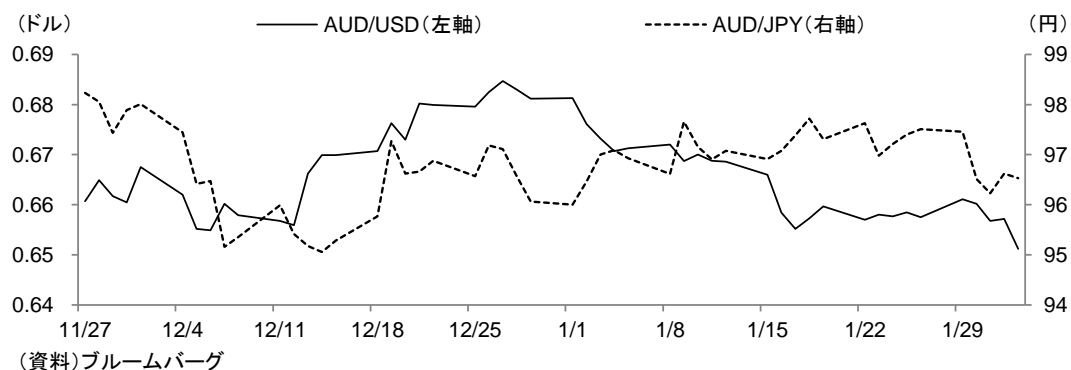
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは、0.66ちょうどを挟んで揉みあったものの、終盤にかけて値を下げる展開。週初29日の豪ドルは0.6577でオープン。特段材料のない中、0.65台後半で推移も、米国時間終盤の米財務省の借入必要額下方修正のヘッドラインを受け、ドル売りが強まると、0.66台前半まで上昇した。30日は豪12月小売売上高が予想を下回る結果になったものの、米金利の低下を受けたドル売りが優勢となり、一時週間高値となる0.6625まで上値を伸ばす。ただ節目を超えた水準では売り需要も強く、米12月JOLT求人好結果を受けたドル買いにも押され、0.66ちょうど近辺まで値を戻す展開となった。31日は豪10～12月期CPIが予想を下回る結果になると豪ドル売りが優勢。0.65台後半まで値を下げたものの、米地銀の決算に端を発した米金利の低下を受けて上昇に転じると、0.66台を回復。その後のパウエルFRB議長の会見内容で上下動しつつも、利下げ織り込みの低下から0.65台半ばまで下落した。2月1日は前日の豪10～12月CPIの結果や米地銀の決算を受けたリスクオフ地合いから軟調な推移が継続。一時0.6508まで下落するも、米経済指標の結果を受けたドル売りを背景に、0.65台後半までじりじりと値を戻して引けた。2日はイベント前の調整もあってかじりじりと値を上げ、0.66台前半まで上昇。その後の米1月雇用統計での強い結果が示されると急速にドル買いが進み、豪ドルも一時週安値となる0.6504まで下落、買戻しも弱く、0.6512で越週した。

今週の豪ドルは上値の重い値動きになることを予想する。31日に発表された豪10～12月期CPIではインフレの着実な鈍化が確認され、マーケットでは早期の利下げ観測が織り込まれ始めている。6日(火)に発表予定のRBAの結果は、政策金利据え置きがコンセンサスではあるものの、声明文やブロックRBA総裁の会見では、利下げに関する言及がなされる可能性が十分に考えられ、その内容には注目しておきたい。他方米国は、FOMC後のパウエルFRB議長の3月利下げを否定する発言や2日の米1月雇用統計の思いのほか強い結果を受けて、利下げ織り込みは徐々に後退しつつある状況。両国間の差異は鮮明であり、経済の堅調さも相まって、よりドルに資金が集まりやすい環境であると思われる。また先週末の下落により、長らく揉みあった日足の雲の下限を大幅に下抜けた。0.66台を超えた水準での上値の重さが認識される中、テクニカル的にも豪ドル売りが誘発されやすい状況であると考えている。今週の主な予定として、6日(火)に豪金融政策決定会合、9日(金)にブロックRBA総裁の議会証言が予定されている。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(1/29～2/2)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。